

# 支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.13

いよいよ寒い季節がやって来ましてな。最近では北陸の雪はそう大したことがない、などと言われておりますが、たまにどっかと降られるとそりゃあ大変でござるよ。

番小屋からお屋敷の道中は中庭を通過して玄関までのおよそ10mばかりでござるが、拙者等にとっては、かの八甲田山の行軍もかくやと思われるほどの難所の連続でござる。



久々に履くカンジキも道中の支障となりましてな、卯の正刻（朝6時）からのお勤めに間に合うためには、いつもより一刻（2時間）も早く番小屋を出なくてはいけません。

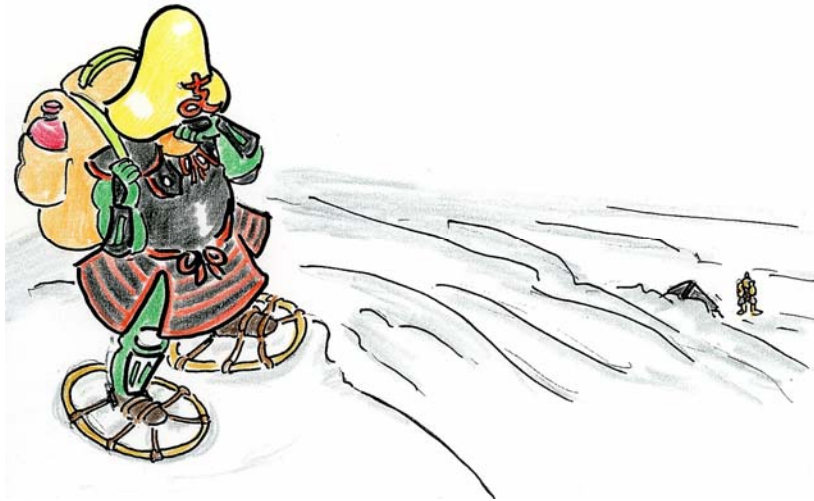
ところがご助の奴ときたら、昨夜も、こんな寒い夜は甘酒でも引っ掛けないと寝れませんぜ。などと嘯<sup>うそぶ</sup>き、拙者の目を盗んで徳利の甘酒を呑み干しましてな、今朝もなかなか起きて参りませぬので

「ご助よ、遅刻は勤務評定の『D』じゃ。D3個で減俸じゃ！分かっておるの？おのれはもうD2じゃぞ！」と拙者は言い捨て、先に番小屋を出立したのじゃ。

お屋敷の中庭には、昨夜降り積もった1尺（30cm）の積雪に、大屋根からの屋根雪が落下、堆積し南アルプス連峰のように拙者の行く手を阻んでおりもうした。

丁度尾根へ出たころでござったか、遥か下の番小屋の方から「旦那様ぁ・・・」と叫ぶ声が。ご助でござった。

拙者の足元の新雪は脆く、少しの振動でも雪崩の恐れがあるというのに馬鹿めが！と拙者は小声で「なんじゃ？」と聞けば



「旦那様あ、聞こえませんぜ。もっと大きい声でお話しくだせえ。」

と大声で聞き返すものじゃから拙者もつい怒りにまかせ

「ええい馬鹿者、雪崩がおきるじゃろっ！」と大声を出してしまったのじゃ。

その直後、雪崩がおき、拙者の体は今登ってきた番小屋からの雪道をドドド  
ドッと音を立て滑り落ちたのでござる。



すっぽりと雪に覆われた拙者を掘り起こしながら

「ひいいひっひいい、だ、大丈夫ですか旦那様。あんな雪の峠道で大声を出しちゃいけませんぜ。」と講釈を垂れるご助に

支援「き、きい、きい・・・」

ご助「はい、貴様という奴は・・・」

支援「だ、だ、だあ・・・」

ご助「誰のせいで・・・」

支援「ば、ば、ば・・・」

ご助「馬鹿者め・・・。続けると『貴様という奴は、誰のせいで、馬鹿者め』と・・・。

それはさておき、さあ、旦那様。急がないと出仕の時刻に間に合いませんぜ。」と、言いながらご助が手にしたのはスキー板を履かせた二人乗りのそり橇でござった。



「ば、馬鹿めが。これを誰が引くのじゃ。」と問う拙者には答えず

「ささ、ミー殿出番でござる。」とご助が呼べば、かなた上空からザザッと  
白い影が。

それは第3話 (Vol.3) 以来の登場となる市民家の猫姫様、「ミー」でござった。

「にゃあん、にゃにゃにゃにゃあんにゃ。」

「鰹節だぞ、と言っております旦那様。」

「やっ、訳さずともわかっておるわい。それ、その櫓をミー殿に結わえて・・・。

さあ、お頼み申す。」



ミー殿の働きであつと言う間に尾根までたどり着いた拙者たちでござったが、  
ミー殿は、「約束ではご助一人のはず。ここからは下りだからもういいにゃ？」

と言うと、拙者たちを橇ごとほっぽり出したのでござる。

動かぬ橇に乗ったまま、こちらも動かぬ二人。

気まずい静寂を破り「・・・ご助、押さんか。」と拙者が命じれば、ご助や  
やあって

「押したいのはやまやまですが旦那様。私は草履ばきですし旦那様は物射香<sup>ものいくつ</sup>  
(意：狩りの時に履く靴)にカンジキでしょ、旦那様はよくそれで私に雪道に  
出て押せなどと・・・」

「う、うるさいわい。儂が押す。」と橇を降りると後ろに廻りこみ、ご助が  
乗った橇を押し始めたのじゃが『うぬぬぬうう・・・』と渾身の力を籠め押し  
ても一向に動かぬ。



「旦那様、雪道はFRは駄目じゃ。やっぱりFFですぜ。」とご助に前から引

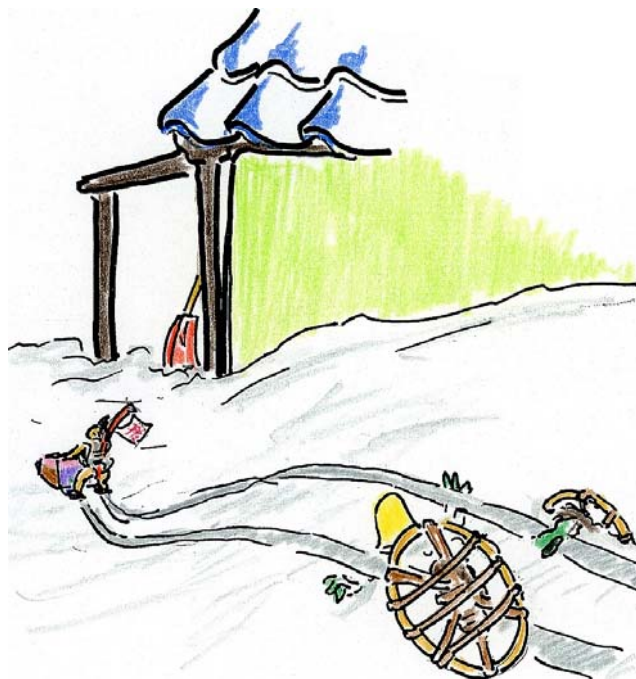
けと言われ、引いてはみたが数十cm引くのがやっとじゃった。

それでも「も、もう少しで、く、下り坂あにい」と最後の力を籠め引いておると背後から、

「旦那様、やはり4WDが最強じゃ。私も押しますぜっ。」と

ご助の声が聞こえたかと思えば急にグンツと軽くなった橇があっという間に拙者の背後に迫り、拙者の体を轢き倒したのじゃ。

雪に埋もれた拙者からは、アラスカのエスキモーのように手際よく橇を操るご助の姿がみるみる小さくなり、はるか彼方のお屋敷の玄関に向け滑走していく姿が・・・。



やがてお屋敷にたどり着いたご助は、未だに雪の下の拙者を見上げると

「何してるんですかあ旦那様あ、遅刻ですよ遅刻う。『D』ですよお、勤務評  
定『D』でいいんですかあい？」と玄関先で大声で叫んだのでござる。

「ば、馬鹿者めっ、おのれという・・・。」と拙者の無念の叫びは、お屋敷  
とは反対側で発生した雪崩にかき消されたのでござる。

「・・・うううう・・・。」全身の痛みで目覚めた拙者は番小屋の居間に寝  
かされておった。

電気ストーブで温められた甲冑が心地よく、傍らには、付きっきりで看病し  
ていたのであろう、顔を両手で覆ったご助が心配そうに・・・。

「ぷっ・・・。いかんいかん、また思い出し笑いが・・・ひひっ。」とその  
ご助の笑い声に

「き、貴様、な、なにがおかしいっ！」と痛みを忘れ怒りだした拙者に





「あっ、ずるいです。気が付いたんですかい旦那様？でも私も悪いなと思いましてね。なに、お屋敷の点検は終わらせておきましたぜ、誉めてくださいませやし。」と

「なに？終わったのかい？」と拙者が聞き返すと

「へえ、全て終わらせまして、番小屋に帰る道すがら旦那様を見つけ出し櫓に乗せお助けいたしました。滑りにくかった櫓の板にもスプレーのラッカーを吹き付けて、ほれ、今干してるところでさ。」とご助。

なるほど、ストーブの前には櫓が立てられておった。

「ほほう。悪いと思ったのか。ならば許そ・・うッ」とした拙者はストーブの前に無造作に置かれたスプレー缶を見て

「ご、ご助、ス、ス、ストーブにスプレー缶は駄目じゃ。爆発するぞ！」と  
叫んでおった。

「へ？爆発？」と慌てぬご助に

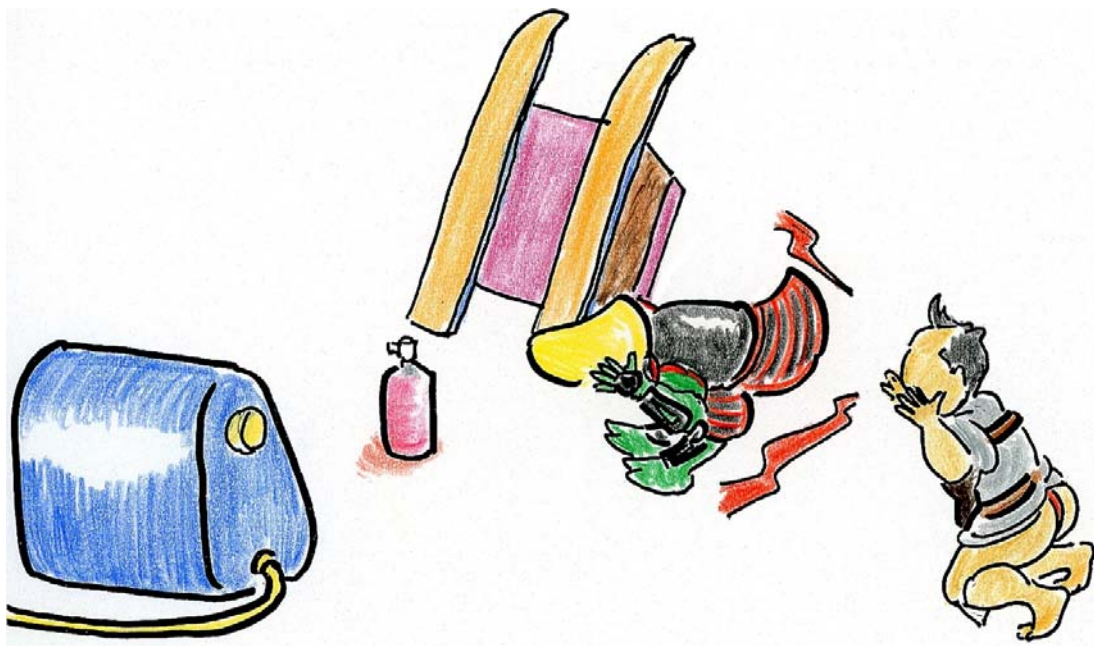
「ば、馬鹿者が！ スプレーには可燃性のブタンガスが使われておる。ストーブの熱で液体ガスが膨張し、スプレー缶が破裂したらガス爆発するじゃろ！」

と拙者が身を起こした刹那 どおおおーん と

「ひいいいーっ」拙者は頭を抱えその場にうずくまったのじゃが・・・爆発は起きておらなんだ。

おそろおそろ顔を上げたところへ再び どおおおーん と

「ひいいいーっ」と拙者が再びうずくまると、

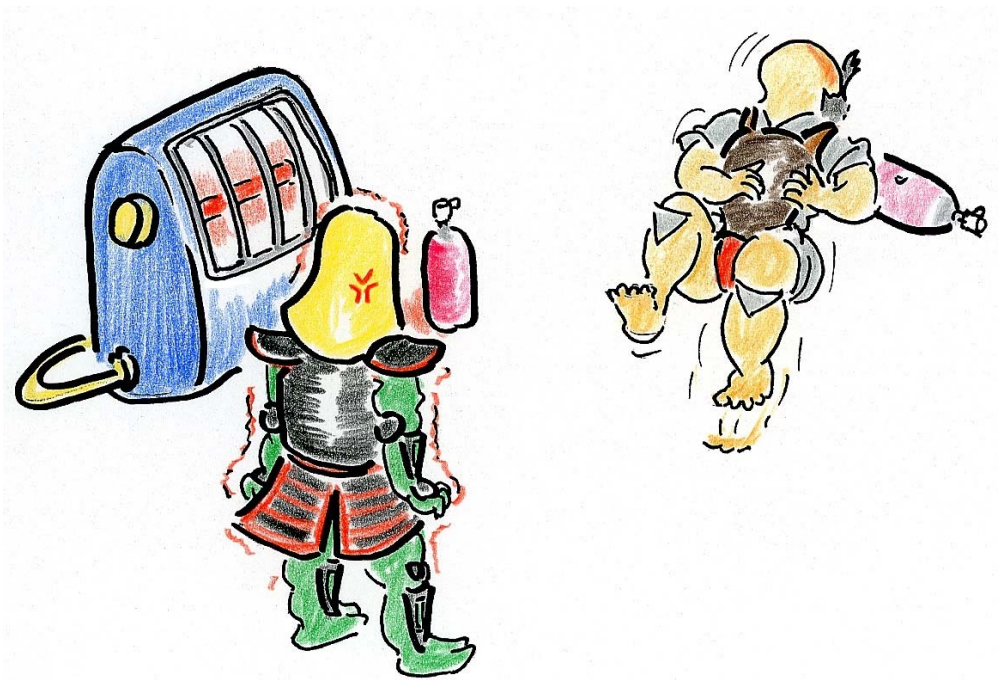


「どおお・・・ひっ、ひいいい、ひいいい・・・だ、旦那様、く、苦しい・・・」

とご助の笑い声が。

「き、貴様か？」

「あ、あたりまえでさ。いひひひ・・・い、いくら私でもスプレー缶をスト  
ーブの前には置きませんぜ。あれは空。空のスプレー缶。ちゃんと穴も開けて  
ありますぜ。」と笑い転げるご助に



「お、おのれという奴は」と、そのとき拙者はご助の背後に穴の開いた古い  
スプレー缶を見つけ「ご、ご助・・・そちが穴を開けたスプレー缶は何本ちゃ？」  
と聞いたのじゃ。

「嫌ですよ旦那様。そんなもの1本に決まってまさ。」とご助。

「……ま、間違えじゃったらすまんが……そちの後ろのスプレー缶は？」

「へ？ああ、これこれ、私が穴を開けたのはこれでさ。」と笑いながら言う

ご助の笑顔がみるみる泣き顔に変わり

「えへへへ……。だ、旦那様あ……。」

大音響が鳴り渡り、吹き飛ぶ番小屋を覚悟した瞬間でござったが、拙者は一縷の望みをかけ、PKに臨む久保殿の建英様のごとく、ストーブの前のスプレー缶を居間の窓越しに屋外へと蹴り上げたのでござる。



しかし、 カンッ と軽い音を立てて窓枠に当たったスプレー缶は、拙者の頭上に。

「な、南無さんっ、それご助っ」とヘディングで。

「な、何をなされるっ。」と負けずにご助もヘディングで。

「き、貴様っ主人に向かってっ。」

「む、無体な。」

「お、おのれっ」

「け、家来は家の宝と申しますぞっ」

「ぬ、ぬかせっ」・・・・・・ と、



十数度もパスを繰り返しておるうちにスプレー缶は冷え、爆発の危険はなくなつたのでござるが拙者のご助のヘディング合戦は深夜まで続いたのでござる。

さてさて、皆々様よ。もう拙者のご助の何が悪かったのかはお分かりですか？

皆様の家では決してこのようなことのないようにの。

それ、しまいのオーバーヘッドじゃ！！（つづく）